

## 課外音楽教育における一考察

高田 伸子

### はじめに

「習い事大国」と言われている日本では、小学生の8割以上が何らかの習い事をしていると言われている。その習い事のなかには必ず「ピアノ」が入っており、その多くはマンツーマンによるレッスンである。親がピアノを習わせることにした理由は子どもが興味を持ったことの他に毎日の練習によって精神力を養うことや発表会などを通して達成感を得ることができることがあげられる。

ここでは個人レッスンのピアノに特化せずアンサンブルを楽しみながら音楽を学ぶ「子と音」の活動を通して音楽教育の在り方を考えてみる。

### 習い事としての音楽の変遷

我が国において幼少期に習い事をしている人は多い。その習い事の内容は年代によって変化しているが教育総合研究所2019年の調査によると現在の子どもの習い事ランキングでは以下のようになっている。

表1 現在の子どもの習い事ランキング

順位	
1	水泳
2	学習塾
3	通信教育
4	ピアノ・音楽教室
5	英語・英会話
6	そろばん
7	書道
8	サッカー
9	武道（剣道・空手）
10	その他のスポーツ教室

（2019年学研教育総合研究所）

また、年代別に習い事を調査した結果は次のようになっている。

表2 年代別習い事

順位	～20代		～30代		～40代	
1	水泳	44.3%	書道・習字	43.9%	書道・習字	46.0%
2	ピアノ	42.4%	水泳	42.2%	そろばん	38.1%
3	書道・習字	36.8%	ピアノ	32.9%	ピアノ	27.1%
4	そろばん	17.8%	そろばん	27.8%	水泳	21.1%
5	英会話	13.2%	公文式	11.8%	公文式	11.6%
6	学習塾	13.0%	英会話	10.6%	英会話	9.0%
7	公文式	9.7%	学習塾	7.8%	エレクトーン	8.0%
8	サッカー	7.0%	サッカー	6.0%	学習塾	6.2%
9	野球	5.9%	エレクトーン	5.0%	剣道	4.9%
10	剣道	3.8%	野球	4.1%	野球	4.3%
順位	～50代		～60代		(2015年引越し待調べ)	
1	書道・習字	48.8%	書道・習字	39.7%		
2	そろばん	47.3%	そろばん	37.9%		
3	ピアノ	26.2%	ピアノ	19.0%		
4	水泳	10.8%	絵画	6.9%		
5	英会話	10.4%	水泳	5.2%		
6	絵画	6.5%	英会話	5.2%		
7	学習塾	4.2%	日本舞踊	3.4%		
8	オルガン	3.8%	柔道	3.4%		
9	剣道	3.8%	学習塾	3.4%		
10	バレエ	3.1%	茶道	1.7%		

この表を見ると水泳をはじめとするスポーツの習い事よりは少ないが、どの年代にもピアノは上位に入っている。では、親はなぜピアノを習わせようとするのか。

半世紀の歴史を誇るヤマハ音楽教室は、「音を楽しむ、感じとる、そして自分の音で表現する。」<sup>(1)</sup>ことが音育だとしている。他の音楽教室でもピアノを習うと身に付く力として作曲者の意図を想像し感情を込めて弾くことを学ぶことで表現力、日々時間をかけて練習することから持久力・忍耐力、聴覚・視覚・触覚を活用して演奏する集中力、レッスンや発表会など緊張感へ繋げる心の整え方を学ぶ精神力、暗譜することでトレーニングされる記憶力、状況を考えて判断・理解・応用する思考力、全身の筋力を無駄なく使うことが求められる体力などがあげられる。これらは小学校の教育で学ぶことはできないのであろうか。

### 小学校学習指導要領音楽編からの考察

文部科学省の小学校学習指導要領音楽編では感性を育むことや情操を培うことが示されている。以下具体的に文部科学省の小学校学習指導要領音楽編をみてみる。

教科の目標は次のとおりである。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現するために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

小学校学習指導要領の音楽目標の中に、音楽教室に通わせたいと願う親が求めていることは全て含まれている。しかし、学校での音楽の授業でそれらが達成できていると言えるのであろうか。そこで、文部科学省の定める授業の時間配分を考察してみる。

別表第一（第五十一条関係）

区 分		第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
各教科の 授業時数	国語	306	315	245	245	175	175
	社会			70	90	100	105
	算数	136	175	175	175	175	175
	理科			90	105	105	105
	生活	102	105				
	音楽	68	70	60	60	50	50
	図画工作	68	70	60	60	50	50
	家庭					60	55
	体育	102	105	105	105	90	90
	外国語					70	70
特別の教科である 道徳の授業時数		34	35	35	35	35	35
外国語活動の授業時数				35	35		
総合的な学習の 時間の授業時数				70	70	70	70
特別活動の授業時数		34	35	35	35	35	35
総授業時数		850	910	980	1015	1015	1015

音楽の学習時間については全体の学習時間からみると、1年生で約8%、5、6年生では、約5%と少ない。そこで音楽的な教育を望む親が学校教育以外の習い事に期待することになる。音楽の習い事を選ぶとき、音楽＝ピアノという時代もあったがヤマハ音楽教室が広く知れ渡り、ピアノという楽器にこだわらなくても早くは3歳と低年齢から音楽教室へ通えるようになった。3歳から一人でピアノを弾くのではなく親子で音楽遊びから始められるプログラムが工夫されている。その教室であっても実際に一人でピアノ演奏を習うのは4、5歳児からになる。ピアノという楽器は一人で多くの音を出せるが、演奏技術を磨くには孤独な練習が続く。そこで、音楽表現

の技術向上をはかりつつ一人きりの辛い練習から解放し自己中心的な演奏ではなく仲間と共にアンサンブルする力も養うことを目標にした「子と音」という活動を筆者の住む地域で発足させた。

## 保育士養成校における音楽教育

保育現場ではピアノ演奏をしながら歌ういわゆる弾き歌いが求められ、就職の採用試験の内容も含めそれらの技術向上が求められる。音楽Ⅰでは、個人レッスンによりピアノでバイエルを基に学ぶ。学生の中にはピアノ初心者もいてピアノの授業を負担に感じる学生もいる。その後、2年次に音楽Ⅱでは子どもの歌による弾き歌いを学び、音楽Ⅲでは、アンサンブルとなり曲種もかなり多岐に選ぶことができる。音楽Ⅱ・Ⅲは選択授業であるが、受講する学生たちは積極的に取り組んでいる。音楽Ⅲを受講する学生の一部にアンケートをとった結果、学生の72%は小学校からの音楽の授業で合唱・合奏が楽しかったと述べたが、一方で、一人での演奏が好きな学生は22%しかいない。このことから音楽する楽しさの中にアンサンブルがあげられる。習い事としてのピアノも個人練習は必要だが、それだけではなくアンサンブルすることで、さらに力を伸ばすことができると考えられる。

## 子と音

子と音とは2013年11月に、感動する心を持った子どもを育てよう～子どもの感動する心と柔らかい感性を育み、人と地域のコミュニケーションを大切にすることで、心豊かな地域の未来をつくることを目標として設立された。歌、ダンス、鍵盤ハーモニカを中心としたアンサンブル演奏を通して表現することを学んでいく。

現実にはピアノを学んでピアニストになる人はごくわずかであり、しかもピアノの練習は、一人で黙々とするしかないため、成長期のコミュニケーションが少なくなってしまう課題に着目し、何とかコミュニケーションを取りながら、楽しく音楽することで、個人の技術向上にも繋がっていくことはできないかというのが設立の根底にある。

また演奏する主な楽器を鍵盤ハーモニカにした理由は、鍵盤楽器であること、持ち運びがし易く、子どもたちが必ず持っていることである。実際に鍵盤ハーモニカを使つてのパフォーマンスをされている方々もあることから参考にした。

テーマとして、共感・共有・共創をあげ、毎回のレッスンお約束として、次のことを守るよう指導している。

1. みんなとの時間を大切に有効にすごそう
2. あいさつと返事をしっかりしよう
3. ダメ言葉を使わずに、ゲンキ言葉で伝えよう（ダメ、できない、ムリ、いや……ではなく、こうならできます！ やってみよう！ など）
4. 自分の言葉で伝えよう（主語述語をはっきりと使うこと）

5. 感謝をしよう（舞台、空間、環境を作るのは、一人じゃない。お友達、先生たち、施設の方、スタッフさんたち、送迎・応援をしてくれる家族にもありがとう！）
6. 楽器や楽譜、施設は大切に使う

2014年より、コンサート、ワークショップなどをはじめ、演奏家のみならず、舞踏家、アナウンサーなど多方面からの指導を受けている。

2014年「体験ワークショップ 打楽器は音の玉手箱」（図1）では生でパーカッションニストの演奏を見て聴いて楽しみ、絵本からのイメージを打楽器で表現した。

また、パーカッションニストと一緒に演奏することで自分のリズムとみんなのリズムをあわせる楽しさを感じることができた。

2015年「体験ワークショップ 鍵盤ハーモニカ」（図2）では鍵盤ハーモニカでアンサンブルをする演奏家を招いて吹いて音楽を演奏するだけではなく振り付けをして動きより楽しく演奏することを学んだ。

2015年「体験ワークショップ 音楽&バレエ」（図3）ではバレリーナを招き、音楽に合わせてながら、バレエの基礎をベースに、美しい姿勢で立つこと、歩くこと等を学んだ。コンサートなど人前に立っても美しい姿勢や動きは、大切であることと、成長期の子どもたちには健康面でも必要であると考えられた。

2016年「体験ワークショップ 話し方」（図4）ではNHKのアナウンサーを招き、はっきりとわかる言葉で伝えることを、アナウンサーの発声方法や、原稿を読むことを通して学んだ。

さらに、地域での大きな発表として、色々な音楽家やバレエ団との共演により、2014年から毎年「親子で楽しむクリスマスコンサート」（図5）催し、また、市民病院内で、学校の休みである春・夏に院内コンサートを行ってきた。



図1 体験ワークショップ（2014年）



図2 体験ワークショップ（2015年）





図3 体験ワークショップ (2015年)



図4 「体験ワークショップ (2015年)



図5 親子で楽しむクリスマスコンサート (2015～2018年)

ワークショップに参加することで演奏するだけにとどまらず幅広い知識を得、人前で演奏することで豊かな表現力が培われた。行動を共にすることで相手を思いやる心も育った。また鍵盤ハーモニカという楽器を選んだことで呼吸器も鍛えられ声が大きく出せるようになり歌唱にも進歩が見られるようになった。現在ではコロナウイルス感染拡大に伴い、練習会場の閉鎖やコンサートも無くなった。しかし、zoom を使った練習状況を確認し、練習会場再開後は感染防止対策をとりながら打楽器のみを使ったレッスンをはじめ、1年2ヶ月ぶりとなる演奏会の練習に励んでいる。

## おわりに

小学校における芸術科目の授業数は今後益々減少されることが予想される。そのような状況下、指導要領に示された目標を達成するためにも正課外としての習い事の音楽教室での指導の内容が重要になる。

今日でも音楽を学ぶためにはピアノの演奏が必修と考え、その修練に労力を費やす子どもも少なくない。確かに技術向上には大切なことではあるが、その考え方はかえって音楽の魅力を半減させ本来ある音楽の楽しさを体感することから遠ざかることになりはしないだろうか。ヤマハ音楽教室等が広まったことで、学びの形態も多様になった。演奏を通して自己を表現することと、他者を敬い響きあうことができることがアンサンブルの醍醐味である。今後「子と音」の様にアンサンブルを中心に展開することにより、音楽の楽しさや素晴らしさを味わうことが将来的にも様々なかたちで音楽と関わる可能性が膨らみ音楽教育の可能性に繋がるのではないだろうか。

## 引用文献

(表1) 学研教育総合研究所 (2019年)

(表2) 引越し侍調べ (2015年)

(1) ヤマハ音楽教室 [www.yamaha-ongaku.com](http://www.yamaha-ongaku.com) (2021年1月)

## 参考文献

小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説音楽編

末永雅子『親が習い事に求めるもの』保育学会大会研究論文集51 1997年

(受理日 2021年1月6日)